



瞬間の海

12月20日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月20日のおはなし「瞬間の海」

最初何が起きているのかさっぱりわからなかった。

光が溢れ次々に色彩と明るさを変えていく。声がする。意味のある声も、ただ笑ったりうめいたり叫んだり思わずこぼれ出る言葉にならない声もある。香りがする。食欲を刺激し、性欲をかきたて、恐怖を呼び、安心感を広げ、郷愁をかきたてる。とろけるような甘さと、隠れた塩味、かみしめたい苦み、次のひと匙を誘う酸味と、燃え上がる辛さ。皮膚が目覚める。指先にすいつくような触感があり、舌先からみつく感覚があり、全身が穏やかな液体に包まれ、心地よい衣類と擦れ合い、次の瞬間誰かの肌と接していることに当惑する。

あまりにも多くの色と音と香りと味と肌触りが押し寄せてきて、何をどう感じたらいいのかわからない。でもやがて、それらは全てなじみ深いものたちだということがわかる。

口の中にふくふくと味わいが広がり始める瞬間の最初の一口。わたしが生んだ赤ん坊が立てる初めての笑い声。バスケットボールのチーム優勝が決まったホイッスル。切り捨てるような一言に冷える心。ああ！という嘆声。思い人と指先の触れる瞬間。意味ありげに向けられた視線。突き落とされるような絶望。想像を絶する大パノラマの風景。

これまでの人生で味わったたくさんの瞬間。思い出深い瞬間。忘れてしまいたい瞬間。

一斉になだれ込んでくると思ったのは最初だけで、やがてわたしは自分がそのたくさんの瞬間に埋め尽くされた空間を漂っていることに気づく。それらの瞬間ははっきりとそこにあって、わたしがその間を漂い抜けているのだ。最初は、わたしが移動するスピードが速すぎてそれらを受けとめきれなかったのだけれど、いまはゆっくりじっくり自分の人生を彩ったさまざまな場面を見ることができる。どれもほんの一瞬で過ぎてしまうけれど、次から次へいくつも続けざまに味わうことができる。

これは以前に付き合った会社の同期の男の子と最初に視線がからみあった瞬間。これは両親を旅行に連れていったときに見たニューイヤー記念の花火。これは中学生の時不用意な一言で友人を傷つけてしまったときの取り返しのつかない瞬間。これは生まれて初めてシュークリームを食べたときの一口目。これは初めての大き役をやり遂げたときの開放感。これは……

そしてわたしはその一連の瞬間に行き当たる。しわだらけで真っ赤でゆがんでいてとんでもなく可愛い生き物。抱き上げた感触と重み。授乳を通じての一体感。初めての笑顔。楽しくて仕方がないという笑い声。めまぐるしく瞬間が積み重なる。手を伸ばし、ごろごろし、はいはいし、言葉を発し、立ち上がり、絵を書き、字を書き、わたしにプレゼントをくれ、文章をかき、友だちができ、何度も抱きしめ、叱り、怒鳴ったことをくやみ、共に笑い、冗談を言い合い、おとなびた言葉に驚き、そして突然訪れた終わり。穏やかな幼い死に顔。

辛すぎて見つめることもできないのだけれど、わたしはそれらの一連の瞬間を繰り返し眺め、笑い、泣き、はらはらし、怒り、恥じ、そしてまた大切に大切に慈しむように眺める。そして思う。これらの瞬間を忘れるまい。決して忘れずいつまでも覚えていよう。

やがてそれらの瞬間はゆっくりと薄れ始め、漂っていた私もいつしか椅子に座り、目の前のカウンターのグラスを見つめていることに気づく。

「いかがでしたか」

バーテンダーが心配そうに言う。

「ヘヴィーね。ちょっときつすぎる」

「すみません」

「ええ。でも」わたしは少し笑う。「悪い感じじゃなかった」

「お客さんが初めて飲まれたんです」

「そうなの？」

「ですからまだ名前もなくて。お客さん、良かったらこのカクテルに名前をつけてみませんか？」

「名前を？ じゃあ、〈瞬間〉、かな。」と言ってからいまのわたしの胸を満たす感情に気づき言い直す。「ううん。やっぱり変える。〈刹那〉、〈刹那〉がいいわ」

（「刹那」 ordered by くーsan/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

3部作のご案内

この作品は、くーさんからいただいたお題「刹那」を元に3つの別々な（でもリンクする）作品を書いた3部作の1つです。良かったら合わせてお楽しみください。

SFP0173 「[瞬間の海](#)」（この本です）

SFP0174 「[リハーサル通りに](#)」

SFP0175 「[刹那詩](#)」

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

瞬間の海

<http://p.booklog.jp/book/40927>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40927>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40927>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.